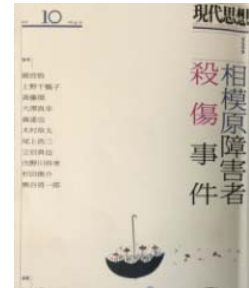


## 障害と高齢の狭間から

写真は『現代思想』2016年10月号である。「緊急特集 相模原殺傷事件」の多くの論稿を悲しく複雑な思いで読んだ。まずは「わがこと」でもあり、表題の興味あるテーマの上野千鶴子さんの論稿から。



齢を重ねる、とは弱いを重ねる、ということ。加齢とは、昨日できたことが今日できなくなり、今日できたことが明日できなくなる、という経験。超高齢化社会とは、どんな強者でも強者のままでは死ねない、弱者になっていく社会であること。すなわち、誰もが身体的・精神的・知的な意味で、中途障害者になる社会だと。---- いついかなるときに、自分が弱者にならないとも限らない。弱者になれば、他人のお世話を受ける必要も出てくる。そのための介護保険である。それだからこそ弱者にならないように個人的な努力をするより、弱者になっても安心して生きられる社会を、とわたしは訴えてきたのだ。

障害者自立生活運動は過去40年をかけて「施設から地域へ」をかけ声に、脱施設化を唱えてきた。たとえ要介助であっても施設処遇を受ける理由はない。「待機高齢者52万人」の声をもとに、「もっと施設を」という政策は、「施設から地域へ」という障害者運動の過去40年の成果を無視し、脱施設化という世界の潮流に逆行するものだ。

障害者介助を業とする渡邊琢さんが『シノドス』に書いた、「なぜ彼らが殺されたのか」以前に、「なぜ、彼らは施設にいなけりばならなかつたのか」という疑問に、わたしは完全に同意する。渡邊さんはこういう。「なぜ、施設入所者は、施設で暮らさざるをえなかつたのか。言葉は悪いが、地域社会から見捨てられたからではないだろうか。地域社会が受け止めてくれるのなら、なにも住み慣れた地域を離れて、不自由な集団生活がまっている施設に入ることはない」。障害者を高齢者に置き換えてみるといい。相模原の事件は、いつ、どこの高齢者施設で起きてもふしぎではない。「もっと施設を」のかけ声のおそろしさがわかるだろう。そして「もっと施設を」のかけ声が、あたかも高齢者福祉の一環であるかのように唱えられていることの欺瞞に、愕然とするだろう。

相模原事件の衝撃は、加害者の残忍さや大量殺人の規模だけでなく、この社会が臭いものにフタ、で押し隠してきた障害者差別のホンネを、公然とさらしたことにあろう。

老人問題は、客体としての高齢者を学際的に扱う研究、老後問題は主体としての加齢の経験に立ち向かう研究。いずれもが「問題」となるのは、前者では「老人」が「厄介者」の「お荷物」だからであり、後者では、高齢者自身が自分の加齢に自己否定感を持つからだ。もちろん両者はつながっている。「社会のお荷物」になる自分自身を受け入れられない、というのが高齢者の自己否定感であり、これが老後問題の最大の課題と言っている。

差別のなかでもっとも深刻な差別は、自己差別ではないだろうか。他の誰かに差別される以前に、自分が自分を差別する。それが自尊感情を損ない、人を無力化し、貶める。わたしはそれを、女性のあいだにたくさん見てきた。男が女を差別する以前に、女が女自身を差別する。----- 同じことは高齢者にも言える。女と高齢者が違うのは、差別する男が差別される女になることはほぼありえないのに、差別してきた若者たちは、いずれかならず差別される高齢者になることだ。そしてこの高齢者差別は、そのまま障害者差別とつながっている。

(2016年10月6日)